

# さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・無限の可能性の先にある最適値
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・おやさま逸話篇から
- 4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 Tel.072-365-2571

E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

## 教会の動き

- 朝づとめ：毎朝・6時30分
- 夕づとめ：毎夕・7時00分
- 春季大祭：1月21日午後1時30分
- 秋季大祭：10月21日午後1時30分
- 月次祭：毎月21日 午後1時30分
- 春・秋季霊祭：3月22日、9月22日 午後1時30分

※教会の場所は、左の地図の●マーク。市立公民館の裏・西側です。

## 教会の動き



教祖百二十年祭

## 天理大学音楽部公演の案内

天理大学音楽部が定期公演を開催します。天理公演が38回、東京公演は32回、大阪公演は26回を数えます。学生の団体として最高のレベルだと思います。チケットは手元にありません。ご希望の方はご連絡ください。今年のテーマは、「想思千五年・源氏物語VI〜螢・常夏の巻より〜」。

- 伎楽 「聖武天皇の夢」
- 管絃 平調・想夫恋
- 謡物 催馬楽・貫河（ぬきかわ）
- 舞楽 高麗寺越調・納曾利
- 太食調・打球楽

天理は2回公演。東京、大阪はいずれも1回公演です。日程は以下の通り。

- 天理公演（天理市民会館）  
2006年10月25日（水）18時30分開演  
2007年3月11日（日）14時00分開演
- 東京公演（浅草公会堂）  
2007年2月17日（土）14時00分開演
- 大阪公演（大阪国際交流センター）  
2007年3月4日（日）14時00分開演

## 《編集後記》

▼第12号のあと、しばらく作成ができませんでしたでしたが、ようやく第13号を発売しました。

▼巻頭から2ページ目に、村上和雄先生の再掲新聞・正論から引用して掲載しました。子供の教育、人間の能力開発、自然開発などを考えるとき、「最適値」「最適規模」の考え方はたいへん貴重なもので、日本にむかしからあった「分相応」の考え方に似ています。「慎み」は、天理教の活動指針・スローガン「感謝・慎み・たすけい」で強調されているところです。

▼8月7日からホームページにブログを設置しました。WordPressというMySQL使用のPHPです。まだ発展途上です。  
<http://sachihiro.com> 「#やまさんのブログ」からお入りください。

## さちひろ 第13号

編集兼発行人・山口 渡  
平成18年10月30日  
大阪狭山市今熊1丁目1133番地  
Tel. 072-365-2571

## 無限の可能性の先にある最適値

サンケイ新聞・【正論】欄で筑波大学名誉教授・村上和雄先生が「慎み」を訴える

わずか1粒の種から1万個以上もの実を付けたトマトの巨木がある。遺伝子組み換えなどの新しい技術により、このようなトマトができたのかと想像されるかもしれないが、そうではない。

このトマトは、1本の根幹から何千もの枝が分かれて、トマトの実を結ぶ。最も多いときで、1万個以上が実するというから確かにすごい。その秘密は、太陽の光と、水と空気の恵みを十分に受けて土なしで育てるところにある。水中の養分を補えば、根の部分は水中に浸しておくだけで栽培できるのである。

つまり、植物がその成長能力を最大限に発揮する上で、土は不要ということなのだ。むしろ、土に根を生やしているがために、潜在的な成長能力は一定に押さえられている。1万個も実をつけるトマトは、実際、土とは無縁である。これが、植物の成長にとって理想的な環境だというのである。

将来、人類が地球を出て、宇宙で生活するためには、このような栽培法が、どうしても必要となる。この巨大なトマトの木は、生き物にはまだまだ私たちの知らない、無限とも言える可能性を秘めていることを、見事に示した。

一方、科学の用語のひとつに、「最適規模・最適値」という言葉がある。ある環境の中の最適な

数や量のこと、自然界は、非常にうまくこの最適規模を守っている。

たとえば、動物は、置かれた環境の中で数が増えすぎると、その後、逆に減っていく。食べ物が足りなくなったり、ストレスが過度にたまり過ぎたりして、集団としての維持が不可能になっていくのである。自然界の生物は、みなそれぞれに最適値を持っている。

《自然の連鎖断たれる問題》  
この観点からすると、植物にとって、1粒の種から1万個も実をつけるのは本当に良いことなのか。

個別にその植物だけを取り出して考えると、問題は解きほぐせない。大地、植物、光、水、大気という自然界全体の成り立ちを視野におさめて、初めてひとつの答えが導き出される。

植物は、大地に根を生やし、成長して実をつける。その樹液や花のみつ、木の実などを食べて生きる虫や小動物がいる。それを食べる動物もいる。死んだ動物は土にもどり、微生物によって分解され、植物の養分となる。こうして巧みな循環がなされているからこそ、自然界は過不足なく成り立つのであって、何処かの連鎖が断たれると、問題が生じる。



(次のページにつづく)

木を切りすぎると動物もいなくなり、大地は枯渇して砂漠化する。1粒の種だけが無制限に繁殖すると、全体が危機に瀕（ひん）する。

このように見てくると、普通のトマトが、1粒の種から1万個も実をつけないのは、土によって本来の成長能力をじゃまされているのではなく、生態系全体の中の適正な成長規模を守っているからだとも考えられよう。

遺伝子情報としては、1万個を実らせる能力を書き込まれているのだから、ぎりぎりまで発現させることは通常なのである。

複雑な生命体は、私たちの想像を超える潜在能力を持っているとみてよい。しかし、生物相互のかかり合い、生物と自然とのかかり合いの中で、能力の発現は一定に保たれる。つまり、生態系という高いレベルの有機的な秩序が保たれていくために、最適値がある。

この生物の中に人類も含まれる。科学・技術を発達させ、際限なく生産の拡大を図るだけでは、人類はいつか行き詰まる。そして、次の世代に大きな

負の遺産を残すことになる。

《解決に必要な人間の慎み》

人間は、限度を超えて物が増えた分だけ、心が貧しくなり、寂しくなっていくのではないか。それを解決するには、人間の慎みが必要である。

先ごろ、ノーベル平和賞を受賞したケニアの女性環境保護活動家ワンガリ・マタイさんが、日本語の「もったいない」をエコロジーの言葉「モットイナイ」として世界に紹介したように、「慎み」も新時代の人間の生き方を表す世界の共通語「ツツシミ」となるよう広く伝えていきたいものである。

「モットイナイ」は単に物を節約することではないし、「ツツシミ」は欲望を消極的に抑えることではないだろう。この言葉の背後には、人類を含めた生物が、大自然の偉大な力「サムシング・グレート」により生かされているということに対する感謝の気持ちが届められている。（サンケイ新聞・平成18（2006）年9月24日・「正論」欄より転載しました）



幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

（善本社刊）から

子供

「どんな苦勞の中でも、親は、子供の成長する姿を見て、喜んで通れ」と、与えられた子供、子供は子宝である。

なのに、その子宝に泣かされる親がいる。さて、どこに原因があるのか。かつて、親に、親は宝と仕えた日があれば、子供を子宝と、喜べる日がくるが、親を泣かした日があれば、子供は、子宝にならず、子凶になる。

だが、子供を責めるな、裁くな、親が通った道だもの。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』 110

一〇〇 魂は生き通し

教祖は、参拝人のない時は、お居間に一人でおいでになるのが常であった。そんな時は、よく、反故の紙の皺を伸ばしたり、御供を入れる袋を折ったりなされていた。《後略》

【解説】

■「心の皺を話の理で伸ばす」 「おやさまは、常日頃から、ものを大切にされていました。たとえばこのお話にあるように、お人でおいでになるときは、不要になった紙の皺を伸ばしておられました。

この話、「反故の紙」だけでなく、人間の心にも通じます。心の皺も常に心がけて伸ばす、神様の話の理で伸ばすことを心がけたいものです。おさしづ」に「言葉一つがよふばくの力」（明治28・10・7）と教えら

皺紙を伸ばして使う

れています。よふぼくとして取り次がせていただく言葉の力の大きさを強調されているのです。

もちろん、その言葉に力があるのは、それが真実であるからです。しかしそれと同時に注意すべきことは、それに力をつけるのは、よふぼくみずからの、よふぼくとしての自覚に立った神一条の努力にほかならないということであります。この点「おさしづ」に、次のように教えられています。

さあく、ほんの言葉だけで言うだけにや分かん。言葉はその場だけのもの。言葉の理を拵えてこそ、八方である。人が知るであるう。（37・11・2）

■環境を考える 紙は今の時代とちがって、かなり貴重なものでした。だから今以上に大切に扱われたのでしょう。

今は、その生産量・使用量は大幅に増加して、簡単に手にもはいるようになりました。一時、ペーパーレス時代が到来すると言われた時期もありましたが、いっこうにその需要は減らないようです。むしろ増加しているのではないのでしょうか。

地球上の木材資源はほとんど消費されて、その結果、集中豪雨やハリケーンや豪雪のような自然災害が増えています。地球環境の悪化、破壊がそれらの災害の背後にあることは間違いないかもしれません。

近未来の災害対策も大事でしょうが、もっと大きな視野で、わたしたちの身近なところから、地球環境を守る努力をしないと、この先大変なことになると思わずにはおれないかもしれません。

このお話から以上二つのことを考えました。